

俺が死んだのはいつだったのだろう。  
覚えていない。

いや、覚えている。

忘れたい？

忘れたくない。

生きていた事を忘れた時、俺は本当の意味で死ぬ。

来る日も来る日も、人を殺す。

体だけが勝手に動く。

あいつの命令で。

耐えてきた。

耐えられそうにない。生きていた時を思い出して、耐える。それを繰り返す。

何度も、何度も。

繰り返ししていくうち、思い出はからっぽになっていった。記憶が無くなっていく。過去の事を忘れてしまう。愛した者がいた事を、信頼できる友がいた事を、恩人がいた事を、そして生きていた事を。

ああ……俺が死んでいく。

十 十

男は悪夢を見る。若かりし頃の夢を見る。

男が産まれた時、既に戦争は始まっていた。男が少年となった頃、戦争は終わりにかけていた。それでも、男は戦場に駆り出された。敗戦も間近だというのに、まだ一四だというのに、男は兵士となった。だが、男はそれを望んでいなかった。

戦場は地獄だった。

相手の腹に剣を突き刺した感触が、腸を断ち切る感触が、男の心を蝕んでいった。

戦場には一人の騎士がいた。獅子奮迅の戦いをみせ、彼が率いた部隊は必ず勝っていた。彼に一騎打ちを挑まれた敵将は、必ず野に首を晒していた。男はその騎士に憧れた。

ほとんどの部隊が敗走するなか、あの騎士だけが勝ち続けていた。男は騎士の戦果を聞くことだけが楽しみだった。

自分の顔を見つめる敵兵の顔に、深々と剣を突き刺す。相手の死に顔を見るのも嫌だったが、頭蓋骨の感触を切っ先を感じる方が嫌だった。無残な死に顔が、男の心を蝕んでいった。

あの騎士はまた勝つたらしい。だが男は気付いていた。あの騎士の部隊だけが勝つても、戦況には何の影響もない事を。それでも憧れていた。その事だけが、唯一の楽しみだったから。

ある日、騎士が捕らえられたと聞いた。将軍が敵に命乞いをするために、騎士を差し出した

らしい。男は激しく落胆すると共に、戦争を続ける気力を無くした。

戦争が終わったのは、男が一五になった頃だった。やはり敗戦だった。

王都に帰った時、男は町並みが無傷な事に驚いた。しかし町を歩くうち、無傷なのは建物だけだと知った。共に育って来た友人は、戦渦に巻き込まれて死んでいた。何年も前に戦死した父が好きだった、トウエクのパン屋も閉まっていた。いつか入りたいと思っていた王立学院も閉鎖されていた。王城には昨日まで敵のものだった旗がなびき、城を守る兵士の鎧は、昨日までの敵の物だった。

男は、そこが自分の町ではないような気がした。そして自分自身さえも、自分の物ではないような気がした。

それから二〇年以上経った。だが、男はその時の事を今でも思い出す。

妻や娘と食卓を囲んでいても、ベッドに入っても、ふと思いつく。眠ると必ず戦場の夢を見た。薪を割っていても、手斧を振り下ろした瞬間、木が血しぶきをあげる幻覚を見た。

男はいつしか酒に逃げるようになっていた。酒を飲めば悪夢を見ない。酒を飲めば幻覚を見ない。だから男は酒を飲んだ。悪夢も見ない、幻覚も見ない、娘の笑顔も見えない。人を刺す感覚を思い出さない、頭蓋骨の感覚も思い出さない、妻の言葉も思い出せない。

仕事もせず、家にも帰らず、酒場に入り浸っていた。気がつけば、男は家族と引き離されていた。家に戻ろうとすると、兵士に捕まった。

敗戦により、ハイドランド法国の支配下となったこの国では、厳しすぎる法律に従わなければいけなかった。男にはよく解らない法律だった。自律能力と自立能力の不足だとか、家族法だとか、そんな事を言われても、男にはまるつきり理解が出来なかった。解ったのは、家族と会えないという事だった。

帰る場所を無くした男は酒場に行った。カウンターの一番奥に座り、酒場の主人にいつもの酒を頼んだ。男は愚痴った。主人は黙って聞いてやった後で、男に仕事を紹介した。主人はちゃんと仕事をして、酒量を減らせば家族に会えると男に言った。だから、男は必死で働いた。

男は酒場に舞い込んでくる仕事を片っ端から引き受けた。近隣の森に出る邪悪な獣を退治した。街道を襲う盗賊から隊商を護衛した。富豪の息子を悪漢から守った。そんな生活を続けているうち、男は荒くれ者が集まる酒場でも、一目置かれる存在となっていた。

だが男は、荒くれ者から認められても嬉しくなかった。自分では使い切れないほど貯まった金も、いらなかった。ただ、家族の温もりだけが欲しかった。

男の酒量は随分と減っていたが、それでもかなり飲む方だった。飲まなければいまだに悪夢を見る。酒代は気にならなかった。

ある日、男は王城へ出向いた。仕事ではない。家族の元へ帰れるようにして欲しいと、懇願に行ったのだ。ハイドランド法を司る大臣は、彼の懇願を跳ね除けた。手紙だけは書いても良いと言われたので、男は手紙を書いた。

妻から返事が来た。娘も一筆書き添えていた。二人とも、男を忘れてはいなかった。妻は、男が頑張っている事も知っていた。妻は男に会いたいと書いていた。だが、二人が会うことは出来なかった。

男は仕事を続けた。酒量は以前のままだったが、泥酔してしまうことは避けていた。妻との手紙での会話は続いた。妻が働いて娘を養っている事、娘が病気がちになった事、男が戻ってこないかどうか監視する兵士の事、色々な事を話した。男はせめて金だけでも妻に送れないかと思っただが、ハイドランド法では金銭の受け渡しも厳しく決められていた。

娘が倒れた。

男がそれを知ったのは、城へまた懇願へ行つた帰りだった。妻の働いた金では治療費に満たないらしい。男は何としてでも妻子に会わなければと思った。城で言われた事は、一定期間仕事を続けて、一定以上の収入があれば、妻子に会えなくも無いと言う事だった。男は妻に、その事と治療費の事を書いた手紙を送った。

返事が来た。治療費は六〇〇〇ウエイだと書かれていた。男は愕然とした。あまりにも高すぎる治療費ではなく、それほどの額が必要な娘の病状に。

手紙には、神殿に連れて行って魔法治療をしたが、効果が無かったと書かれていた。この国の医療や魔法では助からないようだった。異常な治療費の大半は、ハイドランドに行くための旅費のようだ。男はハイドランドが嫌いだっただが、魔法技術が祖国よりも圧倒的に上回っているのは知っていた。

男は自分の貯金を調べてみた。四〇〇〇を少し越えたところだった。普通に働いていたのでは、二〇〇〇ウエイを貯めるのに一年以上かかる。男は、より高額な仕事をする事にした。酒場の荒くれ者でも避ける、危険な仕事を好んで引き受けるようにした。

男は酒場に入った。喧騒を避けるように、カウンターの一番奥に座る。

誰も男に近寄ろうとはしない。男はすぐ横の壁を見た。雑多に貼り付けられている、様々な仕事の幹旋状にまぎれて、国の正式発行の幹旋状が紛れていた。

「やめときな」

主人が男の興味に目ざとく気付いて、カウンター越しに言う。男は視線だけで理由を問いつながら、主人の後ろに陳列する酒瓶を指差そうとする。男が指差すより早く、主人がフヨ酒のボトルを手に取った。男はいつも一杯目にこれを飲む。

「一年、二年ほど前か……兵士隊が派遣されて失敗した仕事だ」

主人は男にフヨ酒をついでやる。男はそれを一息で飲むと、酒瓶を棚に戻そうとした主人を引きとめた。主人が酒瓶を男の前に置く。男は視線と肩をすくめる動作で、詳細を教えろと告げる。主人は何も言わずに手を差し出した。その手に三ウエイ硬貨がおさまると、主人は周りに聞こえないように話し始めた。

「前の大戦の遺物だ。先王<sup>バカ</sup>の手下が、戦争が終わった事も知らねえで洞窟に閉じこもってやがる。それを殺せって仕事だ」

他の客達が騒ぐ声に、ちらりと目を向けてから続ける。

「問題なのは、そいつが魔術士だって事だ」

テーブルを指でコンコンと二度叩く。

男は酒を注文するふりをして、三ウエイ硬貨をもう一枚主人に渡す。

「やばい研究をしていたらしくてな、今まで洞窟に行つて帰つてきた奴はいない。逃げ帰ってきた奴もな。ああ、最初に派遣された兵士隊だけは三人ほど逃げ帰つたらしいが……それ以外は全滅だ。悪いことは言わん。やめときな」

男が壁から幹旋状を剥がす。そこに書かれている金額は、破格の高額であった。相場の三倍にもなる、三六〇ウエイは魅力的だ。

男はフヨ酒をまた口に流し込むと、席を立てて店を出て行つた。その背を主人が見送つていた。

「あいつともお別れか……」

呟いて、残つた酒を口に運んだ。

冷気が洞窟を包んでいた。

名を忘れ去られた洞窟の入口に、男が立っていた。男は手斧を持ち、腰には小さな鞆と酒瓶を下げていた。

洞窟の奥へと向かう。何かの視線を感じる。周囲の気配を探したが、何もいない。男は更に奥へと進んだ。

足元が滑り、男は壁に手をついた。壁は湿っていた。天井や壁から水が湧き出している。

山が多いこの国には、このような洞窟が多く存在する。戦時中も、洞窟を拠点として出撃した事が何度もあった。男は、洞窟の奥に戦友の死体を見た気がした。男は手斧を脇に挟むと、幻覚を消すために、腰に下げた酒瓶を取って一口だけ飲んだ。酒瓶を腰に戻すと、手斧を持ち直す。洞窟の奥を見る。そこには暗闇が広がっているだけだった。

奥へ進む。入口の光が見えなくなってきた。男は周囲の気配を探つてから、腰の鞆から松明と火打石を取り出した。何度か火打石を打つ。石の打ち合う音が洞窟に響き渡る。更に何度か繰り返した時、洞窟の中に小さな光がひっそりと灯った。

男は松明で周囲を照らしてみた。瀕死の上官が男を見つめている気がした。男は身震いして、幻覚を消すために酒をもう一口飲んだ。恐る恐る周りを見回したが、誰もいなかった。

洞窟は複雑に分岐していた。男は足元だけを見て歩いていた。迷いの無い歩調だった。

男が見ていたのは水だった。天井や壁から染み出した水は、地面に無数の水溜りを作っていた。男は、その水溜りが一定の方向に、ゆっくりと流れている事に気付いたのだった。水が流

れる方向に歩いたのは、ただの勘だった。しかし男は、自分の歩く道が正しいと確信していた。体が冷えてきた。男は幻覚のためではなく、体を温めるために酒を飲んだ。しばらくすると、体が軽く火照る。だが、まだ酔ってはいない。男は酔うつもりが無かった。持ってきた酒も、酔わない程度の量だった。

前の方に何かが見えた。男は、一直線に歩いていった。死体があった。

壁にもたれかかって、座ったままの死体だ。男は酒を一口飲んだ。死体は消えない。幻覚ではない。男は死体に近づいて観察してみた。

右手には剣を持っている。左手の指が少し欠けている。腹には穴が開いている。確実に、死んでいる。

男は中腰になって、死体の顔を覗き込んだ。くすんだ茶色の髪は、水に濡れて湿っていた。顔の皮膚が三割ほど無くなっていった。死体は無表情だった。男は戦場を思い出した。少しだけ、死体が可哀相になった。男は哀れむように死体を見つめた後、再び歩き出した。

腹から剣が生えてきた。

男は何が起こったのか解らずに、自分の腹から生えた切っ先を見つめた。一步、歩く。腹から生えた剣は、腹の中に戻っていった。二歩、歩く。背中から何かが出て行った。男は、呆然としながら振り返った。

死体が、立っていた。

死体はだらりと垂らした腕に、剣を握っていた。剣には男の血が付いていた。

男は手斧を振り上げると、動き出した死体に襲いかかった。男には油断があった。男は悪しき魔術の一つに、死者を操るものがあることを知っていた。その術をかけられた死者は、術者の意図通りに動き出す。その動きが緩慢であることを、男は知っていた。

だが死体は、男の手斧をあっさりとかわした。男は、この死体が自分の知る術で動いているのではないと気付いた。

死体が剣を振る。男は手斧で剣を受けようとした。男にはまだ油断があった。男の知る術では、動かされている死体は非力なはずだった。しかしこの死体は違った。男の手斧が弾き飛ばされた。死体は、男よりも強靱な筋肉を持っていた。男は決して非力ではなかった。今までも、力比べでは負けた事の方が少なかった。

男が一瞬の自失から立ち直ったのは、死体の剣が脇腹を切り裂いてからだだった。男は体勢を崩しながらも、弾き飛ばされた手斧を眼で探した。見つかった。そう思った時、胸が斬られた。胸から血が吹き出た。酒で火照った体が、急速に冷えていく。男は地に膝をつき、そして倒れた。

男は、地面を這って逃げようとした。倒れたまま、腕だけで前に進もうとした。背中に剣が刺さった。ゆっくりと、剣が背中から抜けた。男は、血を吐いた。

男は自力で逃げる事を諦めたが、生きるとは諦めなかった。腰から酒瓶を外すと、仰向けになつて、死体に投げつけた。酒瓶が死体に当たつて碎け散る。死体は無表情だつた。男は敵を油断させるために、助けてくれと懇願するつもりだつた。言う前に、肺が刺された。男は激しく咳き込んだ。

男は手に持ち続けていた松明を、死体に投げつけようとした。松明は、男が倒れた時に水溜りに浸かつて、火が消えていた。だが、男はそれに気付いていなかった。男は死体に向かつて松明を投げつけた。刺さつたままの剣が、傷口をさらに広げた。

男は、ふと家族の顔を思い出していた。一人娘のために、椅子を作つてやった事を思い出した。泣いている妻の顔を思い出した。手紙のやり取りや、大臣への懇願、娘の病氣、どんどん思ひ出すうちに、急に申し訳なくなり、男は思ひ出の中の家族に謝つた。男の意識はそこで途切れた。

男が動かなくなつてからも、死体は男を見つめていた。男から流れ出た血が、死体の足元に辿り着いた。死体は血を見つめていた。

死体の肩間に、かすかに皺がよつた。

死体は、男に剣を突き刺した。抜いて、また刺した。抜いて、刺した。それを、繰り返した。

男は、とうに死んでいた。

\*

俺が生きていたのはいつだつたのだろうか？

覚えていない。

思ひ出したい。

忘れたくない。

忘れてしまった。

あいつが俺に言う。人が来た。

人を殺した。

体だけが勝手に動いた。

思ひ出した。

親父の事を。

少しだけ、自分の意思で体が動いた。

人を殺した。少しだけ、自分の意思で。

耐えられない。

生きていた時の事を、思ひ出したい。

少しだけ、思ひ出した。

憎んでいた人の事を。親父の事を。

少しだけ、思い出した。

優しくかった老人の事を。親父が殺した人の事を。

思い出して、思い出して、親父を殺した。親父に似た、他人を殺した。

耐えられない。

生きていた時の事を思い出しても、耐えられない。

生きていた時の事を思い出しても、解らない。

俺は、誰だったんだろう……

十 二 十

「私はお父様の人形ではありません!」

少女はそう言って家を出た。ドレスを脱ぎ捨て、召し使いの服を強引に貰い、家を出た。路銀も持たず、お気に入りの警備兵を強引に連れて。

数ヶ月が経った。少女は路銀に困っていた。

道を歩きながら、横を見る。たくましい肩がそこにあつた。少し上を見る。家を出た頃は短かつた明るい金髪は、随分と長くなっていた。少女が憧れた優しい顔は、家を出た頃に比べて、精悍になつていた。少女はくすりと笑つた。

「どうしました?」

精悍な顔が少女を向いた。若葉色の瞳が、優しく笑っていた。少女は顔を赤くして、前を向いた。

「ど、どこへ向かっているのかと……」

少女はうるたえて、誤魔化した。若葉色の瞳の青年は、丁寧に説明してやった。

「ロツソに、しばらく滞在しようと思つています」

「ロツソ? 王都の?」

「ええ。一度だけ行ったことがあります。美しい町です。きつとあそこならばお嬢様もお気に召されると」

「私はもうお嬢様じゃないわ。あの家は捨てたの。だから、あなたも私の事を名前で呼んでちょうだい」

少女はそう言ったが、彼女は働かない。働くという概念が無い。青年に給料も払わない。給料を払うという概念が無い。しかし、悪意も無い。ただ、無知なのだ。

少女の父が、青年にこっそりと路銀を持たせなければ、二人とも今ごろ骨と皮になっていただろう。少女が家を捨てたのであれば、青年がついて行く必要はないという事に、少女は気付いてはいなかった。

少女は美しくはあったし、性格も悪くは無い。だが無給で、青年自身が働いて養うほど、忠誠心を刺激される存在でもなかった。彼の忠誠の対象は、少女ではなくその父なのだ。彼は少女の父に恩があった。

主人の使者が青年の元へ来たのは、少女が家を飛び出した二日後であった。主人には彼らの足取りが把握されていたらしい。使者が持ってきた手紙には、少女を守ってやってくれと書かれていた。少女が家から飛び出したのは、主人が勝手に結婚相手を決めたからだだった。その時青年は、かつて吟遊詩人が歌った駆け落ちの恋歌を思い出した。少女はいたくそれを気に入っていた。

「お前を連れて出たのは、駆け落ちのつもりかも知れん」

そう書かれた主人の手紙に、青年は困惑した。少女の事は嫌いではないが、恋愛感情は微塵も無かった。

「すまんが、娘の好きにさせてやってくれないか。娘の気が済むまで、お前が守ってやってくれ」

青年はこの時、主人の言葉の意味を深くは考えなかった。

主人からの路銀はすぐに尽きてしまった。毎晩宿に泊まり、料理店に入り、乗合馬車などで移動していれば、当たり前である。青年はそれを危惧して、行く先々で日雇いの仕事をしたが、もうその貯金さえも尽きようとしているのだった。

主人からの援助は途切れていた。主人の身に何かあったのかも知れないと青年は恐れたが、彼は命令どおり少女を守り続けていた。

「ねえ、この国って昔戦争に負けたんでしょ？」

少女が急に言った。主人が治める地域は、隣国との国境近くのため、中央部の情報はまったく入ってこない。少女は、歴史に興味が無かった事もあり、この国の歴史をほとんど知らなかった。

「ええ。なんでそんな事を聞くんです？」

「だって、王都に行くんでしょ？ 戦争に負けたんなら、王都の人は私たちよりたくさん苦労をしてるんじゃないの？」

「確かにそうですけど……」

「じゃあ、戦争の事も知らないで、何か失礼な事を言っちゃうかも知れないじゃない」

青年は、少女を少し見直した。悪い人間だとは思っていなかったが、他人の事を考えられない人間だとは思っていたのだ。

青年が少し唇に笑みを浮かべると、少女はまた赤くなった。

「なんで戦争が起きたのかしら？」

少女が呟くように聞いた。青年もそこまでは知らなかった。

「私も生まれる前です……知っているのは、二六年前この国は負け、ハイドランド王国の

属国となったということです。お父上が領主となられたのも、ハイドラランドの、地方ごとに領主を置くという法がこの国にも入ってきたからです」

「あら、じゃあ私はこの国が負けていなかったら、普通の町娘なのね」

そう言って、少女は夢を見るような表情になった。彼女の父は領主になる前から豪商だったので、普通の町娘などにはなりえないのだが、青年はあえてそれを指摘しなかった。

少女はそれから、この国の歴史を知りたがり、青年は知っている限りの事を教えてやった。話すうち、彼らはいつしか王都ロツソへ到着していた。日は既に傾いていた。

宿を取った。部屋は二つだ。いくら路銀が厳しくとも、青年が少女と同じ部屋で寝ることは無い。二部屋取る金が無い時や、部屋が無い時には厩うまやや廊下で寝ていた。それでも、少女がどうしてもというので、青年は無理をして二部屋取る事になっていたのだ。

だからこの日も、部屋は二つだった。

夜も更けた頃、青年は息を殺して部屋を抜け出した。仕事を探すのだ。少女と部屋を分けているのは、こういう意味もある。別にやましい事をするわけではないが、青年は自分が働くという事を少女に知られたくなかった。

夜の王都を歩きながら、青年は自問した。自分は少女をどう思っているのかと。

働きもしないで、給料も出さずに、お願いという形の命令だけを出す。それについては何度も怒りを覚えた。だが、自分が働いた金で少女が旅を出来るということを知れば、たぶん少女は傷つく。少女が傷つく事を、青年は恐れた。

「何故なんだ？」

突き詰めて考えるうち、青年は一つの事実を突きつけられる事となった。青年は愕然とした。

少女への恋愛感情は、微塵も無い筈であった。

「どうしたの？ 口を開けて」

「えっ？」

我に返った青年は、下から大きな灰色の瞳が覗いている事に気付いた。

「お嬢様、どうしてここに!？」

少女は寝間着ではなく、衣装だった。

「ウイルが出て行くのが見えたから……」

迂闊だった。いつもならば窓に面した通りは避けていたのに、今日はそこにまで気が回らなかった。

「ねえ、どこに行くつもりだったの？」

青年は答えに困った。

「私を置いて、どこに行くつもりだったの？」

少女は怒った様子ではなかった。ただ、今までに見たことの無い真摯な眼をしていた。青年はなんと答えればいいのか、ますます困っていた。

「私はやっぱり足手まとい？」

気付いてしまった。青年は愕然とした。自分が足手まといだと解れば、少女はきつと自分を責めるだろう。自責して、傷つくだろう。青年はそう思った。だが何かが引つ掛かった。

「ねえ、私はやっぱり足手まとい？ 私を置いてどこへ行くつもりだったの？ お父様の所？」

「そんなことは！」

咄嗟に叫んでから、青年は気付いた。少女は全てを悟っていた。自分が足手まといであることも、青年が父親に頼まれたからついてきていることも。

青年はしばらく黙り込んだ後、精一杯の笑顔を無理矢理作った。

「夜風にあたっていただけですよ。さあ、宿に戻りましょう」

そう言って、宿へ歩き出す。少女は少し遅れてついていった。

青年が目覚ますと、外が騒がしかった。いぶかしく思って窓の外を見てみると、扉が軽やかにノックされ、少女が入ってきた。

「おはようウィル。外の騒ぎを見てきたんだけど、聞く？」

「おはようございます。是非聞きたいですね」

少女が話したそうだったのと、好奇心もあつて、青年は笑顔でそう言った。

「なんでもね、兵士隊が結成されるらしいの」

「兵士隊、ですか？ それは何故でしょうか？」

兵士隊ならばすでにある。恐らくそれとは別の、何らかの目的を持って結成された部隊の事を、少女は言っているのである。青年はそのことを少女に聞いたが、少女はそこまで聞いてきたわけではないようだった。

宿から出て、朝食を取りながら事情を聞こうと、青年は食堂へと向かった。

カウンターの一番奥に青年が座る。少女がその横に座った。

「何にする」

疲れた顔の店主が聞いてきた。店主の後ろには酒瓶が並んでいる。夜には酒場になるのだろう。

「おすすめのを頼むよ、二人分」

勝手に少女の分も注文する。青年は壁にもたれかかろうとして、そこにある張り紙に気付いた。見ると、仕事の幹旋状のようだった。何かいい仕事が無いものか物色しようとして、一枚の幹旋状が目にとまった。雑多に張られている幹旋状の中に、隠されるように埋もれたそれを、青年は手に取った。

「やめときな」

店主は青年の興味に目ざとく気付いて、カウンター越しに言う。青年は手に取った幹旋状を見てから、店主へ顔を向けた。

「何故だい？」

陽気に見えるようにつとめながら問う。幹旋状には国の正式発行を示す印が押されている。成功報酬も凄まじく高い。

「死ぬぞ」

青年の横で少女が身を強張らせた。青年は強がるようにして、肩をすくめてみせた。店主は何気なく、手を差し出した。

「なんだ？」

その意図が解らず、青年が困った顔をした。店主は、我に返ったように手を引っ込めた。

「いや、なんでもねえ。気にするな」

そう言っ、ため息をつく。

「四日前だ。その席にいつも座ってた馬鹿がいてな……………その依頼を受けたまま、帰って来ねえ」

店主はまた、ため息をついて、厨房へ入った。しばらくすると料理を持った店主が出てきた。

「辛気臭え話、すまねえな。ほれ、もぎたてベツトウと朝摘みポルのサラダ。こっちはゴールド魚のフヨソース添えだ」

青年と少女の前に、サラダと魚を置く。少女が行儀よく食前の詠唱を始めたので、店主が少し驚いた顔になった。店主は青年に近づいて、少女に聞こえないように耳打ちした。

「兄さんよ、あんたらこの界隈の奴らじゃあねえな。しかも身分も低くない、違つか？」

「確かに南から来たけど、ただの平民だよ。南では農神信仰が盛んなんだ」

だから少女が祈るのも、南では当たり前だ。青年は言外にそう言った。店主は青年達の素性をそれ以上詮索しなかった。

「そーいや、町が騒がしいけど何かお祭りかい？」

祭りなどではないのは青年も解っていたが、あえてそう訊ねてみた。店主は青年が手に持っている幹旋状を指差した。

「それだ。国が自分で出した依頼の解決に乗り出したんだよ」

「どんな依頼なんだい？」

「魔術士さ。先王が戦時中に雇っていた魔術士が、戦争が終わった事も知らずに研究を続けてやがるって噂があつたんだ。国としても放っておくわけにはいかねえが、魔術士が生きてるなんて思っちゃいなかつた。なんせ戦争が終わって二〇年以上経ってるからな。そこで、面子もあるから高い依頼料で、志願者に適当にやらせちまえて事になった」

店主は青年の手から、幹旋状を荒々しく奪い取った。

「兵士隊も一度派遣されたが、壊滅状態で逃げ帰ってきた。しかも魔術士にやられたという確証もなかったらしい。そこで国はこの手の仕事を幹旋してる全ての店に、この幹旋状を貼る事を強制しやがった。こんな高い値をつけたら、馬鹿が群がるのなんぞ目に見えるのにな。だ

があまりにも帰ってくる奴が少なすぎた……」

「じゃあこの騒ぎは討伐隊を？」

青年が聞くと、店主は幹旋状をカウンターに置いて答えた。

「そうだ。これ以上放置しておく、ハイドランドの耳に入りかねんからな。ようやく自治権が強化されてきたのに、それを剥奪されたくはないんだろ。大規模な討伐隊を編成するらしいが、数日中でも先行部隊だけ派遣するそうだ」

「それじゃあ、この幹旋状も必要なくなるってわけだ」

青年はそう言っただけ幹旋状を見た。

「そうじゃなかったら情報を請求してる」

店主は苦笑して肩をすくめた。青年もつられて苦笑した。成功報酬の三六〇ウエイは魅力的だが、そんな危険な仕事は避けたかった。何を言っても少女がついて来る気がしたからだ。

幹旋状を元の壁に戻すと、青年も食事をとる事にした。料理は中々の味だった。

サラダを食べ終えた青年が、ゴールド魚に手をつけようとした時だった。一人の男が、赤毛の少年の手を引いて、店の中に慌あわただしく入ってきた。

「親父さん、赤髭は来てねえか!! 野郎、昨晚から帰ってねえって坊主がつ!!」

店主の顔色が変わる。店主には心当たりがあった。

「あの馬鹿! 行きやがったのか!」

店主は青年が壁に戻した幹旋状を睨みつけた。青年は、ふと赤毛の少年に目をやった。

少年は泣いていた。

冷気が洞窟を包んでいた。

名を忘れ去られた洞窟の中を、青年と少女が歩いていた。青年は古びた皮鎧の腰に剣を、少女は真新しい盾と短剣を持っていた。

「お嬢様、これ以上進むのは危険です。戻りましょう」

青年が言う。青年は少女を庇うように、一歩先を歩いていた。

「嫌よ。私は約束を破りたくないの」

少女は赤毛の少年に、父を連れて帰ると約束してしまった。少女が頑固なのは、青年にもよく解っていた。だが、今回はやはり青年も譲れなかった。

「お嬢様、屈強の傭兵も兵士隊も帰ってこなかったような洞窟です。我々の手には負えません」

「嫌。それに、あなたなら大丈夫でしょ?」

「私だけならまだしも、お嬢様まで守る自信はありません」

二人の声が洞窟に反響する。

「足手まといにはならないわ。もし足手まといになったら、私を見捨ててちょうだい」

「お嬢様!」

青年が怒鳴る。少女は驚いて立ち止まった。青年が怒るところを見るのは、初めてだった。「……ごめんなさい」

少女は素直に謝ると、肩を落とした。二人の間に沈黙が流れる。しばしの間、洞窟には水音しか聞こえなかった。

「でも……やっぱり私はあの子を助けてあげたい」

少女の消え入りそうな呟きに、青年は微笑した。青年は、少女が他人のために一生懸命になっているのが、嬉しかった。

「ウイル、お願い。ついて来てちょうだい。私一人では無理なの」

少女は自信が無さそうに言った。もう、青年の心は決まっていた。

「ご命令とあらば、どこまでも」

そう答えた言葉に、嘘は無かった。少女が満面の笑みを浮かべる。

青年は、なぜ少女を傷つけたくなかったのか、その既に解っていた理由をようやく認めた。

青年は、少女の笑顔が見たかった。いつも、笑顔でいて欲しかった。そのためになら、自分は何でもするだろうと思いい、急に青年は気恥ずかしくなった。

青年が前を向き、再び歩き始める。少女が二歩後ろを歩く。しばらく歩くと、道が二つに分かれていた。青年が右に曲がる。後に続くこうとして、少女は天井に何かがへばり付いている事に気付いた。少女が悲鳴を上げると、天井の何かが青年に飛びかかるのは同時だった。

青年の右腕が地面に転がる。血が噴出する。

「ウイル！ ウイル！ 腕が！」

青年が腰に差した剣を、不慣れな左手で抜く。青年は少女に何も言わなかった。ただ、少女を守るように、前に立った。

青年の腕を斬ったのは、剣を握った死体だった。人の形をしているが、それはどう見ても死んでいた。腹には穴が開いているし、顔の皮膚が少し無くなっている。青年は、敵を理解する事をやめた。目の前に敵がいる。青年が少女を守る事に、それ以上の理由など必要なかった。少女を守るという意志だけで、青年は何とか意識を保っていた。

青年が構える剣は、切っ先が不安定に揺れていた。青年は、血を失い過ぎていた。急速な体温の低下に怯えながら、青年は一步後ずさった。逃げるためではない。少女の盾になるためだ。

「お嬢様、逃げてください」

青年は死を覚悟した。だが少女は答えず、涙を流しながら首を振るだけだった。

死体が少女を見る。青年は、その視線を遮るように立ち塞がった。青年には、死体が意識を持っているように思えてならなかった。死体が青年を凝視する。無表情だった死体が、少し表情を変化させたように、青年は感じた。

死体がゆっくりと剣を構えた。次の瞬間、青年の腹部が貫かれる。急所だ。青年の予測をはるかに上回る速さで、死体が動いたのだった。青年は、倒れた。

「ウィル！」

少女が駆け寄ってくる。倒れた青年の頭を抱えて、地面に座り込む。青年は、薄れていく意識の中で、少女を連れてきた事を後悔していた。青年は、自分がもう死ぬ事を悟っていた。最期くらいは少女を名前で呼ぼうと思った。少女が喜ぶかも知れない。そう思った。

「逃げる……」

だが、最期の言葉さえも、力が続かなかった。

少女は言葉が出てこず、青年の死が信じられず、泣いた。

泣きながら、自分の愚かさを憎んだ。

足手まといだと理解していたのに、ついて来た事。自分が勝手に、少年と約束してしまった事。青年を無理矢理連れて、家を出た事。青年に、好意を持った事。少女は、自分が取った行動の、全てを憎んだ。

泣きながら、少女は一つの事に気付いた。青年の最期の言葉だ。青年は、敬語を使わなかった。少女は、なんとなく、その意味を悟った。

青年の唇に、自分の唇を重ねた。まだ暖かった。

死体が剣を振り上げる。少女はそれに気付かない。死体の口が少しだけ動いた。少女はそれに気付かない。死体が剣を振り下ろした。少女は

\*

俺は生き返った。

死んでいるが、生き返った。

過去が帰ってきた。苦痛をともなつて。

あいつがまた言う。人が来た。今度は二人だ。

だから、俺は殺した。殺したくは無かった。

体が勝手に動く。動かされる。

だが、それも終わるだろう。

俺は生き返った。

自分の意思で、体を動かせるようになる。きつと、なる。

帰ってきた過去は、暖かった。でも、辛かった。

死んだ妻がいた事を思い出した。

彼女を守るために、必死になっていたのを思い出した。

あの二人を見て、思い出した。

まだ、帰ってこない過去もある。

それが、全部帰ってきた時、俺は本当の意味で生き返れるのだろう。

まだ、体は動かない。  
まだ、俺は諦めない。  
生きてやる。

あいつを殺すまで、生きてやる。

十 三 十

ヨハンは物心がつく前から、兵士になろうと決めていた。

ヨハンが生まれたのは終戦後だった。父は兵士だった。父の背中を見て育ったヨハンは、兵士に憧れた。

父は、周囲の大人たちから敬意を払われていた。

先の大戦の時、ヨハンの父は高名な騎士だった。終戦直前、父は味方に裏切られ、敵国に捕らえられた。

終戦後、父は解放された。処刑されなかったのが奇跡だと、周囲の大人達は言っていた。国に戻ってきた父は、騎士を辞め、兵士となった。理由は誰も知らなかった。

ヨハンは父に聞いてみた。なぜ兵士になったのかと。父は笑って、人を守りたいからだと言った。ヨハンは、騎士も人を守るのではないかと思っただが、口には出さなかった。

数年が経ち、一三歳になったヨハンは、兵士隊に志願した。規定の年齢に達していなかったが、見習いとして仮採用となった。

見習いの主な任務は牢番の手伝いだった。牢番の主任は父だった。ヨハンは仕事が楽しかった。

ある日ヨハンは、自分と同じ年の囚人がいると教えられた。フォルクという名の囚人だった。この国では珍しい赤茶色の髪を見て、ヨハンは彼に興味を持った。

フォルクは粗暴だが、陽気な少年だった。ヨハンが牢の前を通りかかるだけで、積極的に話し掛けてきた。二人はすぐに仲良くなった。

数ヶ月が経ち、フォルクが釈放となった。その日、ヨハンは非番だったため、フォルクの釈放を知ったのは翌日だった。友人の姿がいつもの牢に無く、ヨハンは寂しくなった。

数日が経ち、ヨハンが牢に行くと、フォルクがいた。檻の中ではなく、檻の外に。フォルクはヨハンと同じ鎧を着ていた。フォルクは兵士隊に入ったのだった。

フォルクは、投獄されてから釈放となるまで、ヨハンの父から更生するように説得されていた。釈放となったフォルクは、ヨハンの父に憧れ、兵士隊に入った。その話を聞き、ヨハンは更に父を尊敬するようになった。

二年が経ち、ヨハンとフォルクは一五となった。二人は正式に、兵士隊に採用された。

二人はそこで、セルゲイという友人を得た。セルゲイは、妙に優雅な物腰の男だった。ヨハ

ンはその事を訊ねてみた。セルゲイは父が貴族だったからだと言った。家は戦乱で没落したらしい。彼は、いつか家を復興させたいという夢を持っていた。

元騎士の息子と、元犯罪者と、没落貴族の息子という、奇妙な三人組は、気がつけばいつも行動を共にするようになっていた。

正式に兵士となった後も、ヨハンは牢番を希望した。父のように罪人を更生させたいと思っただの。父は既に別の任務についていた。フォルク達もそれぞれ別の部隊に配属された。

ヨハンが十八になった頃、一人の罪人が牢に繋がれた。名はヒルテム。十年の投獄が命じられていた。

ヒルテムは、いつもうつむいたまま、何の言葉も発さなかった。食事を出しても、数口だけ食べて、後は必ず残す。誰かが話し掛けても、雰囲気だけで黙らせた。ヨハンはヒルテムに怯えた。

月が綺麗な夜の事だった。牢獄にも、月光が射し込んでいた。ヨハンは、ヒルテムが顔を上げている事に気付いた。ヒルテムは月を見ていた。ヨハンには、ヒルテムの横顔が、なぜか悲しげに見えた。ヨハンの、ヒルテムへの恐れは消えた。

次の日から、ヨハンは積極的にヒルテムに話し掛けた。返事は無い。それでも話し掛けた。一向に返事を返してこないヒルテムに、ヨハンは意地になった。毎日毎日、その日あった事を話し続けた。

一年も経った頃だった。ヨハンの言葉に、初めてヒルテムが返事をした。返事は一言だけだったが、ヨハンは話し続けた。毎日それを繰り返す。すると、またヒルテムが返事をした。ひと月も経つと、ヒルテムはヨハンの話に相槌を打つようになっていた。自分からは決して話し掛けて来ないが、返事だけはしてくれるようになった。ヨハンは嬉しかった。

更に一年が経つ頃には、ヒルテムも自分から話し掛けるようになっていた。他の牢番達も、ヒルテムに対して恐れを抱かなくなっていた。

ヨハンは、ヒルテムと色々な話をした。ヒルテムは、ヨハンにだけ過去の話をした。ヨハンは、彼の人生に同情した。

ヨハンはヒルテムに、釈放されたら兵士にならないかと誘ってみた。かつて、父がフォルクにした事を、自分もやってみた。ヒルテムは、考えておくとだけ言った。

更に一年が経ち、ヨハンは二一歳となっていた。この年、ヒルテムが釈放となった。この口ツティ王国が建国二〇〇周年となったため、恩赦が出たのだ。

自由になったヒルテムは兵士隊に志願した。仮採用となった。

ヨハンは、フォルクとセルゲイにヒルテムを紹介した。三人はすぐに打ち解けた。元騎士の息子に、明るい元罪人、没落貴族の息子に、暗い元罪人。ヨハン達四人は、兵士隊の中でも一風変わった存在だった。

それから一年が過ぎた。

ヒルテムが兵士隊に正式採用されると、四人は同じ部隊に配属された。彼らに最初に与えられた命令は、奇妙なものだった。

王都ロツソより、半日ほど西へ行った所にある洞窟の調査。

配属された部隊の面々を見て、フォルクとヒルテムが、任務に疑問を持った。

調査任務にしては、兵士の数が多すぎた。加えて、兵士のほとんどは、老兵と新兵だった。

二人はヨハン達に気をつけるように言ったが、命令にそむくわけにもいかず、四人はそのまま洞窟へ向かった。

洞窟に入り、興奮した新兵達は、根も葉もない噂話をした。洞窟には宝がある。伝説の魔法が眠っている。処刑された先王が生きている。噂は部隊中に広がった。新兵達は、名誉や富を得ようと、任務を忘れて浮き足立った。続いて、新兵を諫めていた老兵に狂想が広がった。老兵達は、新兵達の噂に、王国の復権を夢見た。気がつけば、部隊は分裂していた。洞窟は複雑に分岐していた。道が分かれるたびに、兵士は思い思いの道へ進んだ。

ヨハンは、悪夢を見ているようだと思った。ヨハン達は、少し開けた場所で狂想の収束を待った。しばらくすると、セルゲイが異変に気付いた。遠くで悲鳴が聞こえたのだった。ヒルテムが、血の匂いを嗅ぎ取った。奥へ進むか、洞窟から出るか、ヨハン達は選択を迫られた。突然、奥から飛んで来た何かが、ヨハンに当たった。ヨハンが崩れ落ちる。その背に、斧が食い込んでいた。

暗闇から姿を現したのは、数人の人間を融合させたような、怪物だった。三本の手に、錆び付いた剣と、槍を持っていた。

ヨハンは、かろうじて生きていた。板金鎧が、致命傷を防いだ。ヒルテムが撤退を叫ぶ。深手を負ったヨハンをフォルクが抱え上げる。フォルクはヨハンを背負って、洞窟の入口を目指した。セルゲイはヒルテムと共に、怪物を食い止めようとした。

だがヒルテムは、セルゲイにフォルクを追いと言った。ヨハンを背負ったフォルクでは、この怪物がもう一体出て来たら抵抗出来ない。セルゲイはヒルテムの言葉に従った。

セルゲイが一度だけヒルテムを振り返った時、ヒルテムは怪物の槍に貫かれていた。

ヒルテムが、死んだ。

ヒルテムが死んで二年が経った。

王都ロツソの中心街は、出兵の準備に活気づいていた。

王都の人々が、魔術士の噂をし始めてから既に数年。一度調査隊を派遣したきり、何人の犠牲者が出てもお勤こうとしなかった国が、漸く重い腰を上げたのだ。討伐隊が結成された。

だが、いざ出兵となった時、討伐隊の兵力は予定の半分以下だった。南方の動乱を鎮圧するために、討伐隊へ組み込まれるはずだった兵員が投入されたのだ。

討伐隊の中には、ヨハン達三人の名があった。彼らは、先遣隊として明日の出兵が決まって

いた。

空が夕日に染まる頃、ヨハンは共同墓地にいた。

「父さん。……父さんが生きていたら、俺になんて言うだろう？」

父の墓標に花を供え、ヨハンはため息をついた。

父が死んで一年半が経つ。父は死の間際に、兵士になった本当の理由を、ヨハんに語った。

ヨハンが幼い頃に聞いた、人を守りたいという理由は嘘ではなかった。しかしそれは、理由の一部でしかなかった。

「明日、ヒルテムの仇を討ちに行くよ」

父が捕虜となった時、処刑にならなかったのは奇跡ではない。ハイドランドの法王に気に入られ、一命を取り留めたのだった。解放の条件は、二度と騎士にならない事だった。

「この国は、相変わらず父さんの嫌いだった国だよ。やっぱり、下々の事を何とも思わない、昔のままの国だよ」

父は法王に誓った。二度と騎士にならぬと。父は、貴族や上級騎士を嫌っていた。父が捕らえられたのも、上級騎士が保身のために父を裏切ったからだだった。

法王は父の言葉を信じた。だが、父の右肩に大きな傷を負わせた。利き腕で剣を振れないようにしたのだ。

一年半前、父はその時の古傷が痛み、落馬した。打ち所が悪く、数日後、父は死んだ。

ヨハんにハイドランドの法王を恨む気持ちはない。逆に感謝さえしていた。

父がもし、五体満足で帰還すれば、貴族達からあらぬ噂を立てられただろう。もしくは、ハイドランドの支配を嫌う者達によって、勝利の象徴として祭り上げられたかも知れない。そうなっていれば、父はもっと早くに死んでいただろう。

父は、剣を持ってなくなつてなお、人を守りたかった。だから兵士になった。

ヨハンは、そんな父を誇りに思っている。

「今日、夢にヒルテムが出てきたんだ。ずっと、俺を睨んでいた。フォルク達に言ったら、怒られちゃったよ。二人は、ヒルテムは俺を恨んじやいないって言うけど、でもやっぱりヒルテムが死んだのは俺の責任だ……」

呟いたヨハンの脳裏に、先程のフォルク達の顔が思い浮かんだ。彼らは、真剣に怒っていた。

「父さんも、ヒルテムは俺の事を恨んでないって言うてたよね。俺は、解らないんだ。ヒルテムがもし俺を恨んでなくても、俺のせいで死んだことには変わりはない。そんな俺が仇を取るって言うても……。本当に、父さんが生きてたら、俺になんて言うんだろう……。……また報告に来るよ。その時にはきつと、元気な顔を見せるから」

そう言うて、ヨハンは共同墓地を後にした。

今夜は不安と興奮で眠れそうにない。眠れない時、ヨハンは睡眠薬の代わりに酒を飲む。彼は酒に弱かった。ほんの一杯で安眠できる。そのため、依存症にもならなかった。

懇意にしている酒場へ向かう。

店に入る。いつもカウンターが一番奥で飲んでた男が、いない。来るたびに男はカウンターの一番奥にいた。店主の親友だと、誰かから聞いた気がする。

店の雰囲気は、妙に暗かった。店を見回してみても、その理由に気付いた。赤毛の少年が泣いていた。

少年の横で、同じような赤毛の、髭面の男が少年を慰めていた。

ヨハンは店主に酒を注文して、少年が泣く理由を聞いてみた。店主は気が重そうに喋った。

「自分を責めてるんだ。自分のせいで、人が死んだってな」

ヨハンの表情が固まる。店主が続けた。

「俺のせいでもあるんだよ。赤髭の野郎がてつきり洞窟に行つたと思つたんだ」

赤髭というのは、少年を慰めている男であろう。店主は、ヨハンの沈黙を誤解したのか、詳しく説明し始めた。

「魔術士の洞窟つてのがあつてな、赤髭はそこに行きたいって言つてたんだよ。坊主が、親父が帰らんつて駆け込んできたから、てつきり洞窟に行つたのかと思つて……馬鹿な事をしちまつた。そこに居合わせた嬢ちゃんが、赤髭を助けに行くつて言い始めちまつて」

店主の説明が聞こえたのか、少年が大声で更に泣いた。自分自身を罵倒する声が、ヨハンの耳に痛かつた。

「その嬢ちゃん達が帰つて来ねえんだ。それなのに、赤髭だけがひょこり帰つて来やがつた」  
ヨハンには、店主の目が潤んでいるように見えた。

「赤髭の大馬鹿の臆病者が。洞窟に行こうとして、怖くなって引き返して来たんだとよ！」

店主の怒鳴り声に、赤髭が肩を震わせた。よく見ると、赤髭は声も出さずに泣いていた。歯を食いしばつて、肩を震わせる。店主も、赤髭も、その息子も、皆、自分自身を責めていた。皆、悔しさと情けなさに、なによりも、相手への申し訳なさに、泣いていた。ヨハンには、痛いほどそれが解つた。

言葉は、無意識に出た。

「俺が仇を取るよ」

決して大きな声ではなかつたが、その言葉は店中に届いた。

「俺は兵士だ。明日の先遣隊だ。俺が、明日、洞窟に行つて、……皆の仇を、取つてやる」  
店には静寂が広がっていた。数瞬の間を置いて、喝采が起こつた。

店主や少年が、驚いたようにヨハンを見ていた。

ヨハンは店主に酒代を払つと、酒を飲まずに店を出た。

喝采は続いていた。

その夜、ヨハンに酒は必要なかつた。

冷気が洞窟を包んでいた。

名を忘れ去られた洞窟の中を、兵士の一団が進んでいた。その数、三〇余名。その中に、ヨハン達の姿があった。ヨハン達は、後から来る本隊の橋頭堡きょうとうぼを確立するための、先遣隊だった。

一行は黙々と歩いた。少し開けた場所に出る。小隊長が一行を止め、七人をその場へ残した。本隊のために、開けた場所を確保していくらしい。

残る二〇余名は奥へと進んだ。道は進むにつれ、細かく分岐していた。後続隊が迷わないように、目印を残す。先遣隊は、ヨハンの先導で歩いていた。

ヨハンは、足元に流れる水を見ていた。水は、地底湖に流れ込む。数ヶ月前、その地底湖を源流とする川の底から、犠牲者の物と思われる装飾品や、二年前の部隊の、部隊章などが発見された。ヨハン達は、地底湖の近くに魔術士がいると考えた。

また開けた場所に出た。小隊長は、八人をその場に残した。ヨハン達三人を含む、残る一〇余名は、更に奥へと進んだ。

ヨハンは、残った面々を見て、一つの事に気付いた。横を見ると、フォルクとセルゲイも気付いたらしい。

「小隊長殿、我々の任務は橋頭堡の確立ではないのですか？」

ヨハンが振り返って訊ねる。

「それはもう終わった。我々はこれより、魔術士討伐の第一陣となる」

予想通りの答えが帰って来た。残った一〇余名は、先遣隊の中でも腕利きの者ばかりであった。

魔術士討伐の第一陣というのが、本当に本隊から与えられた命令なのかは、ヨハンには解らない。解らなくともいいと、ヨハンは思う。ヨハンは、ヒルテムの仇を討てれば、それでよかった。

道が三つに分かれていた。水は、その全てに流れていた。ヨハン達は困惑した。どの道を進むか迷っていた三人を置いて、小隊長が決断した。

「部隊を三つに分ける。それぞれ、ヨハン、セルゲイ、フォルクの三人に先導してもらおう」

小隊長はそう言って、懐から三つの石を取り出した。その一つを、他の二つに叩きつけると、石は青く発光した。クリホ石と呼ばれる魔石である。クリホ石は、二つ以上を激しく叩きつける事により、しばらくの間発光する。叩きつけた石の光が消えると、叩きつけられた側の光も消えるという特性を持っている。

「戦力分散が危険な事は承知している。光が消えたら、その場で引き返せ。合流してから、情報を統合する。くれぐれも独走はするな」

クリホ石がヨハン達に渡され、部隊が三つに分かれた。ヨハンは、三人の兵士を従えて、右端の道を進んだ。

道は次第に細くなっていっていった。水は途切れることなく、足元を流れている。

ヨハンが殺気に気付いた時、既に最後尾の兵士は絶命していた。

ヨハンが抜剣する。もう一人の兵士が、左肩から腕を斬り落とされる。致命傷だ。ヨハンと、最後に残った兵士が剣を構える。ヨハンはクリホ石の光で、敵を照らそうとした。敵は素早くつた。光を避けるように、体を深く静めると、一気に間合いを詰めて来た。

兵士と敵が剣を打ち合わせる。ヨハンは、そこで初めて、敵が剣を持っている事に気付いた。ヨハンはクリホ石を投げ捨てると、兵士に加勢した。だが、二人がかりになっても、敵の方が上手うわてだった。

敵が、ヨハンの振り下ろした剣を受ける。兵士がその隙に斬りかかった。敵は、素手で兵士の剣を止めた。敵は、兵士から剣を奪い取ると、兵士の顔を蹴り飛ばした。壁に叩きつけられた兵士の首は、あらぬ方向に曲がっていた。

ヨハンは仲間を呼ぶ事さえ忘れて、恐怖した。ヨハンは、恐怖を振り払うために、友人の名を呼んだ。

「ヒルテムツ！」

恐怖は消えた。ヨハンは敵に斬りかかった。敵の動きは、先程よりも遅く感じた。何合も打ち合って、ヨハンは敵を追い詰めていった。

敵の足を払い、地面に倒して、ヨハンはとどめを刺そうとした。先程捨てたクリホ石が、敵の顔を照らしていた。

「ヒル……テム？」

ヨハンの動きが止まった。腹部に激痛が走る。刺された。敵が立ち上がる。入れ替わりに、ヨハンが倒れた。ヨハンは、力を振り絞って仰向けになった。敵の顔を確認しようとしたのだ。クリホ石の光が、敵を下から照らしていた。

敵の腹には穴が開いていた。顔の皮膚も、だいぶ無くなっていた。無くなっていたが、ヨハンには判った。

「お前、ヒルテムだろ？ 何やってるんだよ、こんな所で……」

言いながら、ヨハンは気付いていた。目の前の男が誰であろうと、死んでいる事に間違いない。例えヒルテムだとしても、死んでいるのだ。

よるめきながら立ち上がる。不意に、自責の念が沸き起こる。

「ヒルテム、お前、やっぱり俺を恨んでいるのか？」

訊ねても、死体は答えない。剣を持ったまま、微動だにせずヨハンと向き合っていた。

ヨハンは、酒場の一件を思い出した。赤毛の少年や酒場の主人に、仇を取ると誓った。ヨハンは迷った。自責と誓いが、交互にヨハンの意思を支配した。

死体が動いた。速かった。ヨハンは飛び退いたが、切っ先が胸を掠める。甲高い金属音が洞窟に響いた。

ヨハンは、敵がヒルテムだと確信していた。ヒルテムが、なぜ今になって自分の前に立っているのか、昨日見た夢は正夢なのか、そうだとすればやはり自分を恨んでいるのか。ヨハンは迷った。

しかしヨハンは剣を構えた。酒場の誓いが、そうさせた。二歩下がって間合いを取る。ヨハンは最初に刺された腹の傷を、ちらりと見た。板金鎧の下に纏った鎖帷子が、重傷となるのを防いでいた。まだ戦える。

死体が斬りかかって来る。ヨハンは死体が剣を振り切る前に、死体へ突進した。重い金属鎧は、ヨハンの敏捷さを奪っていた。死体の懐へ潜り込みながら、この期におよんでヨハンは迷った。ヒルテムは自分のせいで死んだ。そのヒルテムが自分に剣を向けている。自分は、ヒルテムと戦っている。本当に、自分はヒルテムに剣を向けていいのだろうか。ヨハンの動きが鈍った。

死体と剣を打ち合う。臂りよりよく力は死体が勝まさっていた。ヨハンの剣が弾かれた。死体の剣が肩口に振り下るされる。ヨハンは、倒れた。

「ヒル……テム。答えてくれよ、やっぱり俺が悪かったのか？」

ヨハンは自責の念に捕らわれていた。瞼が重たく感じる。ヨハンは目をつむって、また訊いた。

「なあ、俺が悪かったのか？ 恨んでいたのか？」

ヨハンは、気配だけを頼りに、言葉を投げかけた。死体は、ヨハンのすぐ側そばに立っていた。死体は何も答えない。ヨハンは意識が遠のいて行くのを感じていた。

遠のいて行く意識の中で、ヨハンは過去を振り返っていた。フォルクとの出会い、セルゲイとの出会い、ヒルテムとの出会い。楽しかった。ずっと、ヨハンは幸せだった。友人達の輪は、心地良かった。

ヒルテムも、きつと楽しかったらうと、ヨハンは思った。ヨハンが誘った兵士隊で、ヒルテムにも友人ができた。とても楽しかったらうと、ヨハンは思った。兵士隊に入ってからヒルテムは、無口ではあったが、初めて会った時よりも明るかった。それを断たってしまったのは、自分の責任だとも、ヨハンは思った。だから、ヨハンは謝った。

「ヒルテム……………ごめんな」

遠くで、何人もの足音が聞こえた。ヨハンは、それを煩うるく思った。そこで、ヨハンの意識は闇に沈んだ。

\*

俺は泣いていた。

涙は流れなかった。

とうの昔に、涙腺は腐り果てていた。  
全ての記憶が、過去が、戻ってきた。

俺は死んでいた。生きていた事を覚えていようとも、俺は、死んでいた。  
色々な人を殺してきた。今も、友を殺してしまった。

俺は、ヨハンだと気付いていたのに、殺してしまった。

刺したくなかった。殺したくなかった。殺してしまった。

殺してしまった。

殺して。

……俺は、あいつを許さない。

そして……俺自身も許さない。

完全に、けりをつける。終わらせてやる。俺の手で……

俺の手で……

十 4 十

ログ市の名物パン屋トキンに、いつの頃から住み着いた若者がいた。名を、ヒルテム・トウエ  
クという。ヒルテムは、若旦那と呼ばれていた。トキンの一人娘と、婚約しているからだ。

ヒルテムは幸せだった。

ヒルテムは、生まれ育った王都ロツソを捨てて来た。だが、彼は良かったと思っている。あ  
の都には、辛い記憶が多すぎた。

父は、王都ロツソで一番のパン屋だった。騎士に憧れた幼少の頃、父の店が潰れた。父は、  
酒浸りとなった。父は盗みを働き、投獄された。父が捕まってから、ヒルテムは隣家の老人の  
世話となった。老人は優しくかった。老人の金物店を手伝いながら、ヒルテムは数年を過ごした。  
一歳になった頃、父が釈放された。ヒルテムは、父を迎えに行ったが、父は既に一人で帰っ  
た後だった。ヒルテムは、一人で老人に、今までの礼を言いに行った。

老人が死んでいた。死体の横には、無精髭を生やした男が、手斧を持って立っていた。男が  
振り返った。父だった。翌日、父は処刑された。

洞窟の地面に、無精髭の男が倒れていた。男が、火の消えた松明を投げつけてくる。ヒルテ  
ムは、それを避けようとしなかった。男が血を吐いた。死ぬのだ。男は焦点の定まらない瞳で、  
何かを見ていた。かすかに唇が動いた。

「ヒルテム、すまない……」

そう言われた気がした。ヒルテムは、唐突に、父を思い出した。男から流れ出た血が、ヒル  
テムの足元に辿り着いた。

汚らしい。

ヒルテムは、自分の足を汚した父の死体を刺した。何度も刺した。男は既に死んでいた。それでも、ヒルテムは刺し続けた。

父が処刑されて一年。ヒルテムは城へ行った。城では、騎士団の入隊試験が行われていた。ヒルテムは、家柄と、父が罪人だということと、相手にもされなかった。ヒルテムは絶望した。

ヒルテムは、王都を捨てた。王都を捨て、ロツティ第二の都市、ログに移り住んだ。

一人でログまで旅をして、ヒルテムは体力が尽きていた。懐かしい匂いに誘われて、辿り着いた先はパン屋だった。ヒルテムは、そこで倒れた。

数日後、ヒルテムはパン屋トキンで働いていた。主人は気のいい男だった。

住み込みで働くうち、ヒルテムはトキンの一人娘と仲良くなった。数年も経った頃には、ヒルテムはその娘と婚約をしていた。

更に数年が経った。二〇歳になったヒルテムは、チェルシー・トキンと結婚した。

ヒルテムは幸せだった。

何があっても、この幸せを守りたいと思っていた。トキンと、チェルシーと、三人でこの幸福な生活を続けていこうと思っていた。

だが、一年後、妻が死んだ。息子と共に。

長子は死産だった。元々体の弱かったチェルシーは、産後、心身ともに衰弱して死んでいった。

ヒルテムは生きる気力を失った。毎日毎日、食事も摂らずに妻の墓の前で、泣いていた。そんな生活をひと月も続けていた。ついにトキンの我慢も限界を越え、ヒルテムを家から追い出した。

ヒルテムは、行く当てをなくし、町をさまよい歩いた。生きる気力を無くしても、なぜか死にたいとは思わなかった。

洞窟の地面に、青年が倒れていた。その横で、少女が青年の頭を抱いていた。

青年は死にかけていた。ヒルテムがやったのだ。一撃で殺すつもりだった。少女の悲鳴で、狙いがそれた。

ヒルテムは、少女を庇おうとする青年に、かつての自分を見た。無性に悲しくなった。涙は出なかった。体は勝手に動く。青年を殺そつと、動く。

「逃げる」

青年が呟いて、絶命した。少女は泣きながら、青年に口づけをした。

ヒルテムの足が、勝手に動く。少女の後ろにつき。少女は気付いてくれない。

「逃げる」

ヒルテムはそう言ったつもりだった。しかし、声帯はとうに腐っていた。声が出なかった。少女は気付いてくれない。

ヒルテムは、ゆつくりと剣を振り上げた。自分の意思ではない。ヒルテムは必死で、剣を止めようとしていた。ヒルテムの意思は、剣を振り下ろすまでの時間を、数秒遅らせたただけだった。少女は、気付いてくれなかった。

家庭を失ったヒルテムは、ロツソに戻った。

再び、騎士団の入隊試験を受けた。また、相手にされなかった。ヒルテムは荒れた。盗みや恐喝で日銭を稼いだ。

一年が経つ頃には、ヒルテムは暗殺を生業なりわいとしていた。そう強要されていた。ある日、ヒルテムは暗殺の現場を、偶然通りかかった兵士に見られてしまった。その兵士を殺せばヒルテムは逃げられた。しかしヒルテムは捕まった。罪も無い兵士を殺す事が、どうしても出来なかったのだ。

ヒルテムは処刑にならなかった。法は変わっていた。父よりも多く人を殺していたのに、手にかけて相手が悪人ばかりだったというだけで、十年の投獄を命じられただけで済んだ。

そこで、ヨハンと知り合った。

冷気が洞窟を包んでいた。

名を忘れ去られた洞窟を、一体の死体が走っていた。

死体は、かつてヒルテムと名乗っていた。

誰も追いつけない速さで、ヒルテムは走っていた。主あしのもとへ。自分をこんな体にした、魔術士のもとへ。

流れる水を追い抜いて、地底湖へと向かう。

ヒルテムの体は、戦うためだけに特化していた。不要な体組織は全て腐り落ち、体を動かす事に必要な部分だけが残っていた。

目は見える。耳も聞こえる。体も動く。脳も、在る。戦う事に必要な能力は全て揃っている。魔術士が、先王に命じられたのは、死なない兵士を作る事だった。

主の命令で動く、戦闘能力を強化された、死なない兵士。理想の、兵士。

ヒルテムは、その実験材料にされた。

魔術士は、初めての成功例だとヒルテムを褒めたほ。自分の意のままに動かしては、その都度褒め称えた。狂気が浮かんだ眼は、ヒルテムを道具としか見ていなかった。

ヒルテムは無に等しい自我の中で魔術士を嘲笑っていた。何が成功例なものか、と。地底湖が見えてくる。すぐ側に魔術士の住処があった。ヒルテムは呟いた。声は出なかった。

何が成功例なものか。俺は、お前の人形じゃない。

だがヒルテムは自分の言葉に自信が無かった。

ヒルテムは魔術士の住処に走り込んだ。手に持った剣の、風を切る音が心地良い。

魔術士はヒルテムの行動を理解しているだろうか。恐らく理解できないだろう。ヒルテムはそう思う。

魔術士の研究室に踊り込む。

俺は人形じゃない。もうお前に操られはしない。

魔術士の姿を確認する。

たどえ、死んでいようとも……………俺は、

魔術士が振り向こうとする。ヒルテムが剣を振りかぶる。ヒルテムは叫んだ。

俺は、人間だ！

魔術士の頭が吹き飛んだ。

異常な膂力で振られた剣は、魔術士の首を切断せず、粉碎した。

ヒルテムは、急速に力が抜けていくのを感じていた。

達成感からではない。自分は死ぬのだとヒルテムは悟った。術者が死ねば、死体は死体に戻る。当然の結果だと、ヒルテムは思った。後悔はなかった。

ヒルテムは、無性に嬉しかった。

死ねる。やっと解放される。

もし声が出たら、叫んでいただろう。大声で、歓喜を叫んでいただろう。

ヒルテムは、無性に悲しかった。

死んでしまう。殺しすぎた。止められなかった。ヨハンを、殺してしまった。

もし涙が出たら、泣いていただろう。泣いて、殺した相手に詫びただろう。

しかし、ヒルテムには声帯が無い。涙腺も無い。とうの昔に、腐り落ちていた。

だから、ヒルテムはただ立ち尽くして、天を仰ぐだけだった。

「ヒルテム」

ヨハンの声が聞こえた。ヒルテムは、ヨハンが自分を迎えに来てくれたのだと思った。

「ヒルテム！」

いや、違う。ヒルテムは、背後を振り返ろうとした。振り返ろうとして、倒れた。足が崩れ落ちていた。

誰かが走り寄って来る。

ヒルテムは、腕で体を支えようとした。腕が崩れた。

誰かが、ヒルテムの体を支えた。その顔を見た。セルゲイだった。

誰かが、ヒルテムの前にひざまずいた。その顔を見た。フォルクだった。

誰かが、フォルクに背負われていた。その顔を見た。ヨハンだった。

まるで、二年前のようだった。ヨハンの髪が随分伸びているのを見て、ヒルテムは時の流れ

を実感した。

ヨハンが、フォルクの背から降りた。ヨハンは生きていた。ヒルテムが斬った肩を押さえ、苦痛に顔を歪めていたが、生きていた。ヒルテムの剣は、致命傷となる前に、鎧に阻まれたのだった。ヒルテムは嬉しくてたまらなかった。

ヨハンが涙を流した。ヒルテムは、自分のために泣いてくれるのが、自分を悼んでくれるのが、とても、とても、嬉しかった。

嬉しくて、ヒルテムは笑った。

口の端を吊り上げる力も無くなって来ていた。だがヒルテムは、心からの笑顔を浮かべようとした。

セルゲイが、フォルクが、ヨハンが、口々に何かを言っていた。

もはや、ヒルテムには聞こえなかった。

三人の顔が、次第にぼやけてきた。

久しぶりに会ったというのに、すぐに別れなければいけない。ヒルテムは、少し寂しかった。

一言くらい、言葉を交わしたかった。もっとしっかり、顔を見たかった。掛け替えの無い仲間達と、抱き合いたかった。

それは、かなわぬ事だった。

それでも、ヒルテムは

幸せだった。

十  
終  
十